


photopos

2014.9.2 ~ 2014.9.24

【神秘学ポエジー～風遊戯 第4集】

photo ヴァージョン

神秘学遊戯団



ガラス窓の
二重映しのように

外を見ようとして
自分を映している

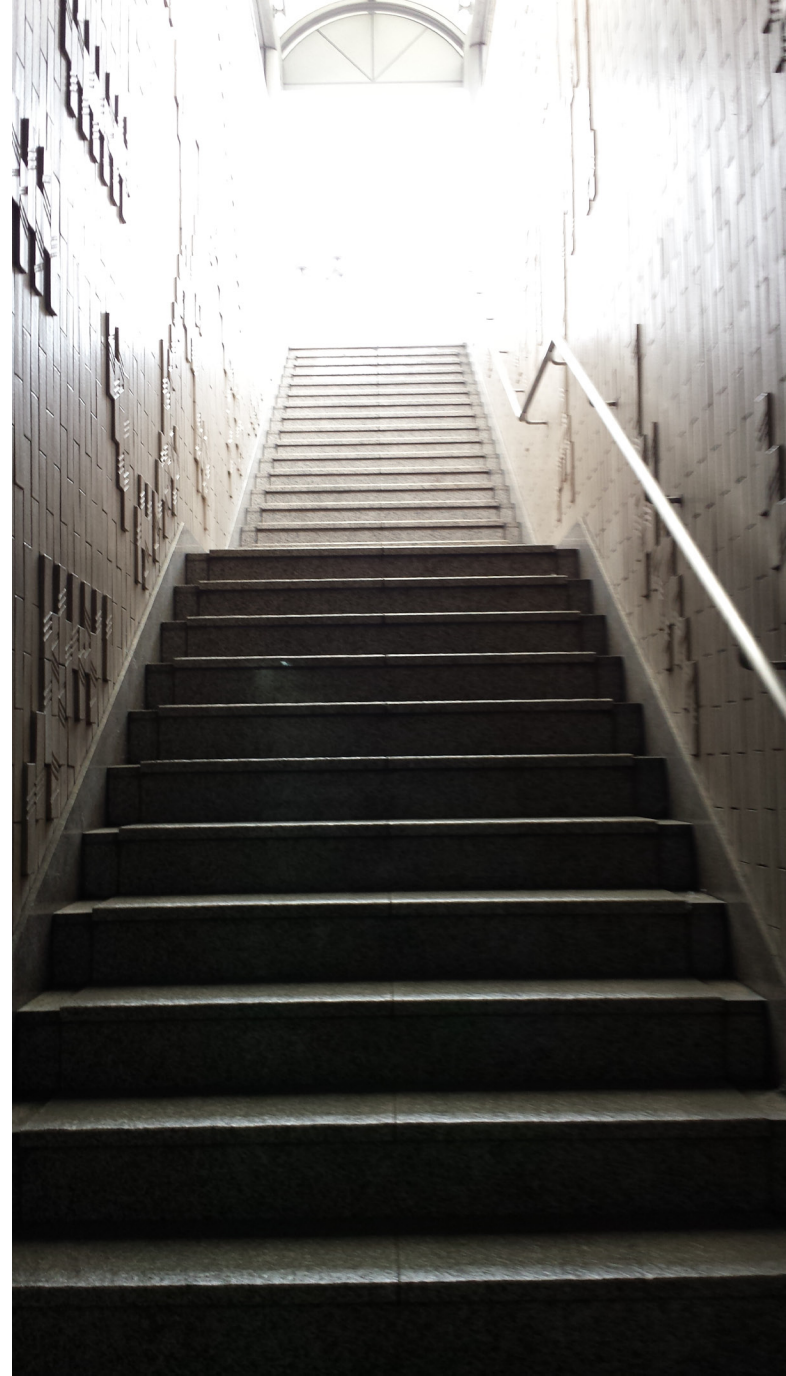
迷っているのではない
さ迷っているのだ

photopos-2

2014.9.2

光あふれる
階段の向こうへ

気をつけな
光は
ときに
墮天使の匂いがする





阿と吽のあいだで
スフィンクスの謎を思う

宇宙のはじまりとおわりと
そして人間と

あ・うん
と言ってみる

呑み込んだものは
光か闇か





ステージはまだ途中だ
星の人よ

両手をそろえて—
なにをみているのか
なにもみしていないのか

ぼくも両手をそろえて
どこかを見てもみようか

いまこの星の人として
それとも
かつていた星の人として

じぶんを燃やすことで
自己実現でもしようというのか
この渦巻き野郎は

やがて灰になるというのに
頑固な役割に徹している

そんなニンゲンも
もはや絶滅危惧種となった

花火のような華やかさなど要らぬ
そんな顔をして
夏の終わりの溜息のように
ゆらり煙をふかしている



土の卵は
どんな夢を見ているのだろう

やがて孵化し
器という果実となっていく

いまはまだ眠りのなかで
その姿を知らないまま

人も土からつくられ
息を吹きこまれたという

わたしもまだ卵のまま
夢を見ているだけなのだろう
みずからの果実を知らないまま

鬼の提灯
赤い顔
光の玉を隠してる

玉をぶいぶい
笛にして

隠れた鬼を
探してみよか

鬼さんこちら
通りゃんせ

こわいながらも
通りゃんせ


じぶんの鬼に
通りゃんせ

見えない鬼に
通りゃんせ

*アートスペース油亀企画展「ツチノミ -うつわは土の果実-」の展示から。

*ほおずきは「鬼灯」とも記される。

*鬼は、「おん（隠）」の音変化で、隠れて見えないものの意とも。



ミツバチの集めできた蜜を食べる
一匹のミツバチが生涯に集める蜜は、
ティースプーン半分ほど

世界を生成させる叡智は
ミツバチのように集められた
秘蜜なのかもしれない


だれも秘蜜を集められなくなったとしたら
世界からは叡智が失われてしまうのか
受粉させることさえできないままに

一生のあいだに集めることのできる
智慧の蜜のことを考えてみる
それが何であるかさえわからないままに

雲のない空は
とらわれのない心のようにだ

雲はさまざまなかたちをとり
姿を変えながらさまよい
にわかになくなり
激しく涙を流しさえする

苦しみのない世界はあるのか
雲はただ浮かび流れている



みつめていると
紋様のなかに
魂が織り込まれていきそうになる

秘められたテクネーで
描き出される文様たちの交響
経糸と緯糸の魔術

わたしのなかで息づいている
さまざまな紋様が踊り出し
花になり虫になり星になる

*バリ島のテンガナン村だけで作られている
経緯緋グリーンシン (ダブル・イカット)。

photopos-11

2014.9.12

何に見えるか
顔に見えたりもするか

そこに見えているものは
見えないものだ

見えないにもかかわらず
何かを受けとられる

意味づけしたくなったり
そこから去りたくなったり

見えているのはじぶんなのだろう
じぶんの顔がそこでにやりと笑っている



その灯りでさえも
何かに喩えることができるのだろう

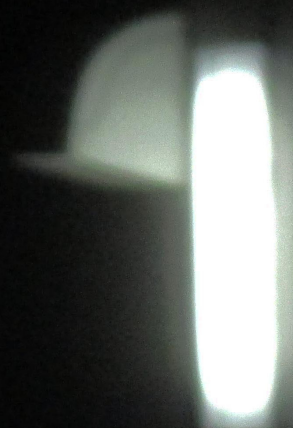
ましてそれを包む闇のことを
何かに喩えないわけにはいかなくなる

夜更けにそれを見ている私の行為も
何かの喩えに見えてくる

世界は比喩である
そんな言葉を聴いたことがある

比喩でない世界
比喩でない私

それらをそのまま見てしまうことを怖れるあまり
すべては比喩の姿をまとめて現れてくるのかもしれない



心にうつる
よしなしごとを
曼荼羅に

あやしく
物狂おしく
浮かべてみれば

泥から生まれ
浮かび咲かせる
花もある

蓮っ葉などといわばいえ
軽くなければ
浮かべもしまい

*岡山市「半田山植物園」のパラグアイオニバス

*吉田兼好「徒然草」～心にうつりゆく由無し事を、そこはかたなく書き付くれば、あやうこそ物狂ほしけれ～

photopos-14

2014.9.14

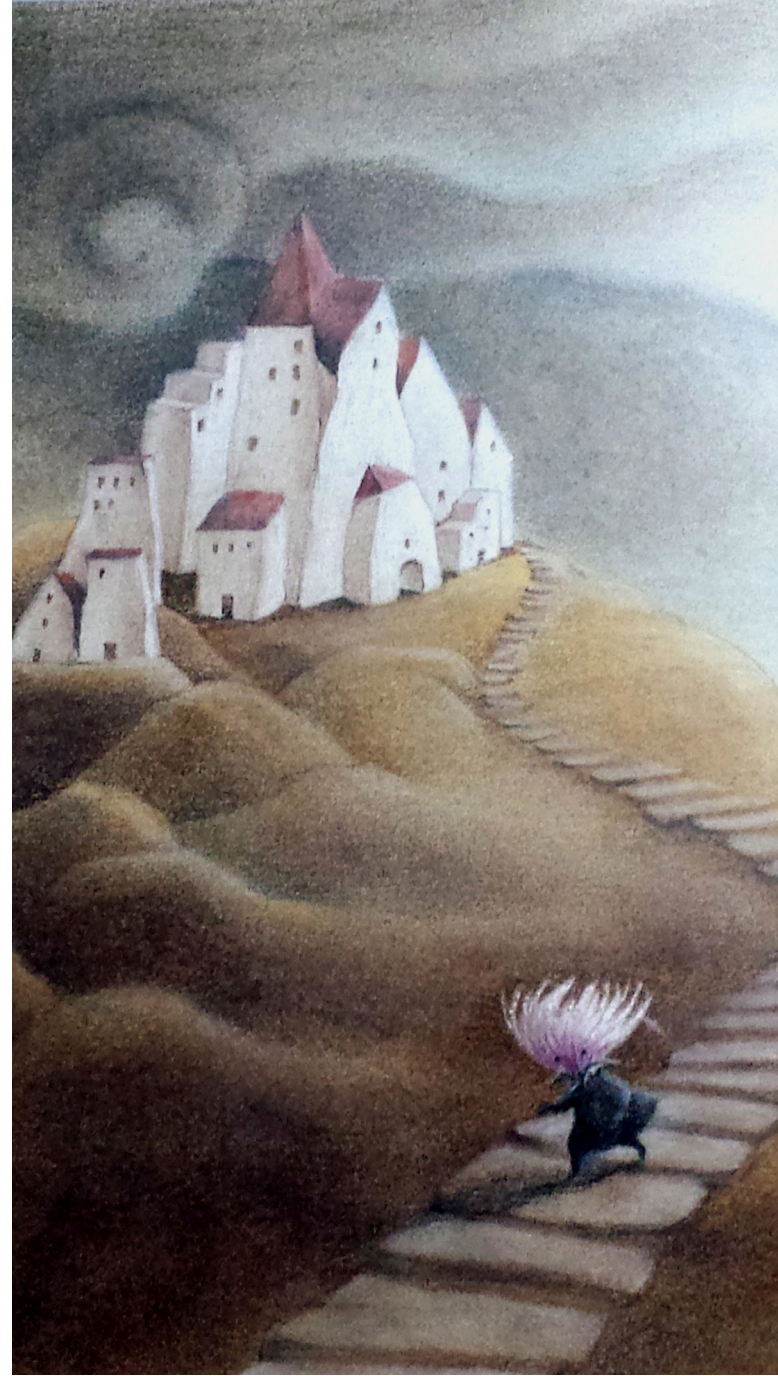
道は遠く続き
雲は迷うばかり

旅立たなければならない
やがて帰還するためにこそ

夢は彼方へと誘い
心は火照りを増す

ムネモシュネが呼んでいる
ふりむくとそこにいるのは私

*奥田千珠さん（木工作家・イラストレーター）の「出発」という作品から。
木でできた「おうち」のオブジェがとても印象的。
以前、作品展があったときに気に入って買い求めた絵画。
*「ムネモシュネ」は、ギリシア神話に登場する「記憶」を神格化した女神。





悪さえ受けいられる
器になれるだろうか

土からつくられた人は
練られ焼かれて器になれるという

善きもの悪しきものを
受けいれ導くことのできる器に

十字架よ何を語る
信じるものを失いかけたときにこそ

* 福岡県の陶芸家「タナベヨシミ」作の珈琲カップ。気に入って使っている。
お尻だって器にしてしまうタナベ作品にしては、ずいぶんシックだけれど。

photopos-16

2014.9.16

夢を見ているのか
地上の星か

種は蒔かれ
夢はやがて花と実となる

私は一粒の種
夢見る星の永遠の断片

私は自らを蒔き
そして自らを刈り取る

大地が肥沃か不毛かは問わない
私という種に願いを

* photopos-15 と同じく、「タナベヨシミ」作の珈琲カップ「たね」。

* 「種」のテーマについては、以前書いた「私という種」という詩に合唱曲として曲をつけてもらったことがある。石原啓子作曲・一橋大学津田塾大学合唱団ユマニテによる演奏（2006.12.9）。テーマは「かつて永遠を去った者としての永遠への帰還」。その演奏はこちらから

<http://steiner.3zoku.com/~steiner/novalisnova/etc/tane.m4a>





私はそこに座って
何をしていたのだろう

茂った樹には巣箱があり
高原は緑に包まれていた

記録はそれらを甦らせ
記憶がそれをたどる

私の記憶とは何か
召還された形象がときに行き場を失ってしまう

記憶の集積のなかで
私というジグソーパズルが解体する

*今年の初夏、蒜山高原でのワンシーンから、「山・樹・テラス」。
「PaperCamera」で撮影したモノクロスケッチのイメージ。



きらきらしてる
すこしどきどき

石の花が咲いている
星が歌うように

心が知らず躍る
恋するように

どんなことも
はじめて

どんなときも
はじめて

はじめてを失くしたとき
世界は歌を忘れている

*愛媛県四国中央市土居町関川で拾った、結晶片岩中の鉄ばんざくろ石。
はじめて河原で見つけたときのどきどきを今も思い出す。

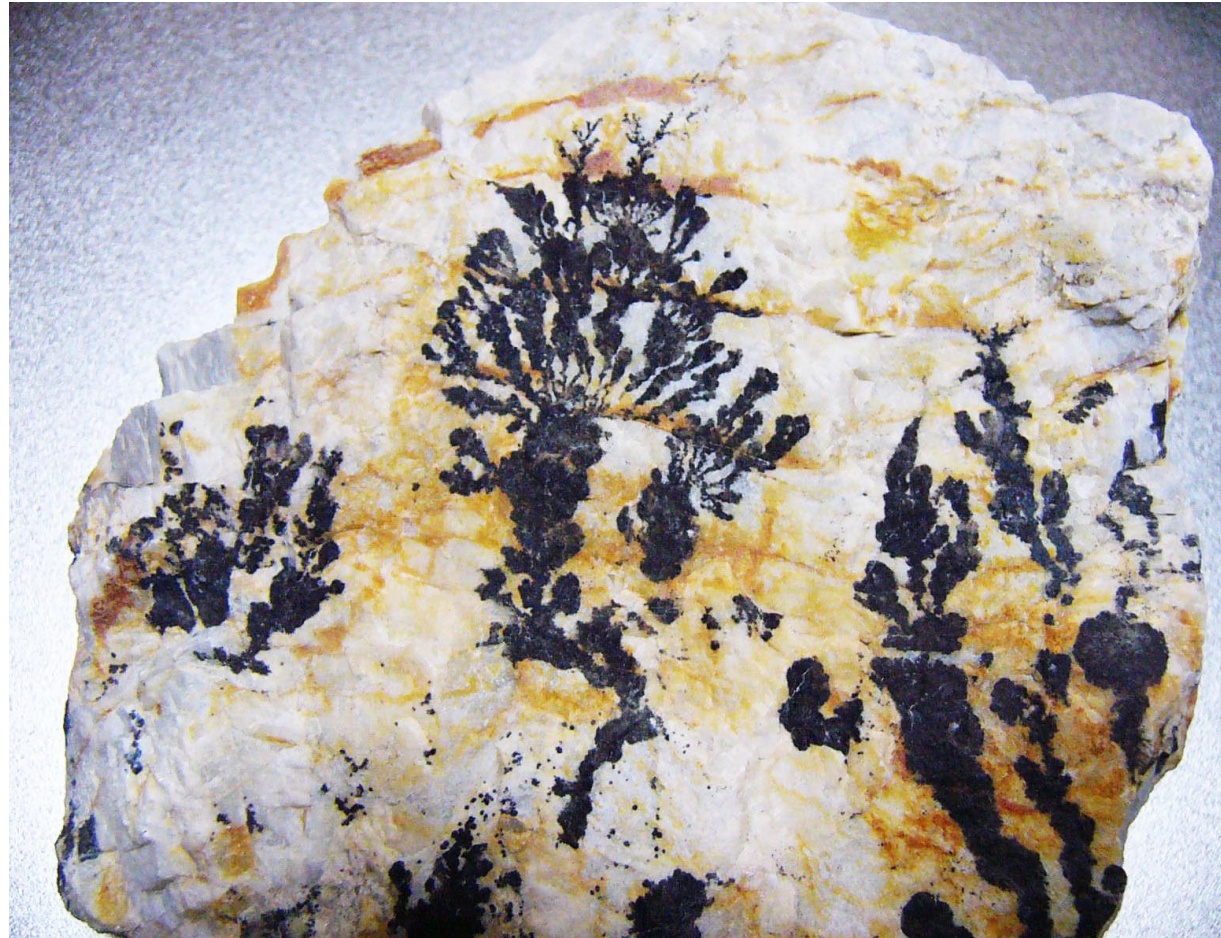
樹のダンスのように
石がふらふらフラクタルしている

ほんとうはどこかで
じっと耐えているのかもしれない

笑っているときも
ほんとうは泣いているように

話しているときも
ほんとうは黙っていたいように

秘密はいつもヴェールのむこうで
隠された顔を静かに育てている



*島根県益田市馬谷城山鉾山で拾った「忍石（しのぶいし）」。
冬の窓に付く霜の雪片のように、自然現象でできるフラクタルによる樹枝状晶。
日本名の由来は、乾燥に堪えしのぶ「シノブ」（羊歯の一種）から。



緑青のマントを翻し
海に面した洞窟へ
魔神が舞い降りる

高笑いしながら
魔神は告げる

秘密が知りたいならば
おまえの真実を語れ

変容する石の魔術が
私のなかで渦巻く

そして私は
みずからを映す鏡のなかで
永遠と刹那の波に吞まれる

* 山口県萩市・海岸近くにある志津木鉱山跡地の「アタカマ石」の洞窟
「アタカマ石」は、銅を含む一次鉱物が風化・酸化したときに生成する鉱物

岩壁に咲く青い石の花は
大地から天への祈り

空の青への憧れか
かつて星だったときの郷愁か

私のなかに咲く青い花もまた
天への限りない祈りなのかもしれない



* 島根県邑智郡美郷町

銅ヶ丸鉱山跡（明治42年閉山）の「胆礬（たんぱん／硫酸銅）」

* 江津市桜江町にある「小さな自然館」の反田さんの案内で現地へ



マグマが岩を変成させ
白と黒の織りなす層をつくりだす

波が洗う海に向け
岩肌を突き出しながら
何を想っているのだろう

私のなかの光と闇もまた
さまざまに交錯しながら
高熱を受けて姿を変え
断崖の姿を創り出しているか

海原に向かって立つ私よ
おまえはたしかに聳えていられるか
ときに激しく波と風を受けながらも

* 山口県萩市 (旧須佐町) にある「須佐ホルンフェルス」

1400 万年前、砂岩や頁岩がマグマの熱変成作用を受けてできた高さ約 15 m の大断崖
大好きな場所で、以前何度も出かけたときのショットから

霧のなか龍は目覚め
その姿をくねらせ始める

数限りない力の流れが重なりながら
地から天へと昇ろうとしている

おまえはいつ目覚めるのか
龍の目がぎょろりと問いかける



* 兵庫県豊岡市赤石の円山川東岸にある洞窟・絶壁「玄武洞」から、早朝の霧のなかの「青龍洞」。重なった六角形の玄武岩が美しい。玄武洞の中でもっとも長い柱状節理が見られる。

* 「玄武洞」は、文化4年（1807年）幕府の儒学者・柴野栗山により伝説上の動物玄武の姿に見えることから。

* 「玄武岩」という名前は、明治17年（1884年）地質学者・小藤文次郎が「玄武洞」の名に因んで命名。



山は祈っているのか
光を受けとめながら
夜へと移りゆく季節のなかで

謎があるのではない
迷っているのは言葉だ
祈りは言葉を超えている

私のなかの謎もまた
言葉の迷いのなかで
光への祈りを求めているのか

* 広島県庄原市にある標高 815m の「葦嶽山」。

1934 年、酒井勝軍が、葦嶽山は世界最古のピラミッド本殿で、北側の鬼叫山が拜殿だとした。

鷹岩や天狗岩・鳥帽子岩、鬼叫山には鏡岩、方位石、ドルメン（供物台）、神武岩と名づけられた、巨岩が多数がある。

* 写真は鬼叫山の「神武岩（屏風岩）」。神代アヒル文字が刻まれていたという。

光のなかで
光に気づくことはむずかしい
闇のなかではじめて
見えてくるものがある

私はみずからの闇を
潜り抜け潜り抜け
光を見出そうというのか
やがて黄金の矢を見出すために



- * 島根県松江市北部（旧島根町）の「加賀の潜戸（かかのくけど）」。佐太大神（猿田彦大神）の出生地といわれる。
- * 海寄りの新潜戸と陸寄りの旧潜戸があり、写真は新潜戸。全長 200 メートルの海中洞窟。
- * 佐太大神が誕生したときの伝説に、黄金の矢で洞窟が射通され、光がさしこみ中が光り輝いたという伝説がある。